

前右近将監、

「常世出でて旅の空なるかりがねも」

「つらにおくれぬほどぞ慰む」

「友惑はしては、いかに待らまし。」と云ふ。

「親の常陸になりて下りしにも誘はれで、参れ」

「なりけり。下には思ひくたくべかめれど、」

「誇りかにもてなして、つれなきさまにしありく。」

「月のいとほなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜」

「なりけりとおぼし出でて、殿上の御遊び恋しく、」

「ところどころながめ給ふらむかしと思ひやり」

「給ふにつけても、月の顔のみまもられ給ふ。」

「二千里の外故人の心。」と誦じ給へる、

「例の涙もとどめられず。入道の宮の、」

「霧や隔つる。」とのたまはせしほど、言はむ方」

「なく恋しく、折々のこと思ひ出で給ふに、よよと」

「泣かれ給ふ。」夜更け侍りぬ。」と聞こゆれど、」

「なほ入り給はず。」

「見るほどぞしばし慰むめりあはむ」

「月の都ははるかなれども」

前右近将監は、

「常世の国を出て旅の空にいる雁も」

「仲間が遅れないで一緒に飛んでいるうちは慰められていることでしょう。」

「友を見失っては、どれほど心細いでしょう。」と言つ。

「親が常陸の介になって下ったのにもついて行かないで、(源氏のもとに)参ったのでした。」

「心の中では思い悩んでいるようだけれど、」

「表面上は(誇らしげに)振舞って、平気な様子で(口々を)過ごしている。」

「月がたいへん明るくのぼったので、今夜は十五夜」

「であったのだなあと(源氏は)お思いになって、殿上(宮中)での管弦の遊びが恋しく、」

「(都の)あの方もこの方も眺めて物思いにふけていらつしやることだろうよ、と思いを馳せなせるにつけても、月の面ばかりを見つめなせる。」

「(ほか)二千里の外故人の心。」と口ずさみなせると、」

「(二千里も離れた古くからの友人を)思つ心。」(周囲の人々は)いつものように涙もとどめることができない。藤壺(入道の宮)が、」

「霧や隔つる。(霧が隔てたのだろうか)とお詠みになった頃が、言いようもなく」

「恋しく、その時々を思い出しなせると、」

「おいおいと声に出してお泣きになる。」夜が更けてしまいました。」と(人々が)申し上げるけれど、やはり(寝所には)お入りにならない。」

「(月を)見ている間はしばらく心が慰められる」

「(恋しい人々と)再び巡り合う月の都(京)ははるか遠いけれども」